

だいたい、ほんとうのこと

中西一貴

8がつ21にち

きょうは、とつても、とつても、いろいろなことが、ありました。

とても、書ききれそうにないので、きょうは、絵はなし。につきだけ、書くことにします。

きょうは、とても早くおきました。日づけがかわってから、ちよつとしかたっていないのに、お父さんに、おこされたのです。

だつてきょうは、とつてもすごいことがおこるんです。じんるい、れきししじょう、初めてのことです。お父さん、ほんとはおしごとだったのに、きょうはしごとに行つてません。たかしくんのお父さんも、あきらくんのお母さんも、きょうは、おうちにいたみたい。それほど、とくべつな日、だつたんですね。おきなさい、ほら、おきて。お父さんのこえも、なんだかこうふん、きみでした。

ちょうど、1かげつまえ、せいふから、じゅうだいはつびようがありました。8がつ21にち（つまり、きよう、ですぬ）、ちきゆうが、このうちゆうにたんじようしてから、はじめて、あさ、というものがやってくる。テレビでアナウンサーが、きようのお父さんと、おんなじくらい、こうふんしたようすで、げんこうを読みあげていました。いままで、おはなしの中だけのそんざいだった、あさ、がやってくるのです。たいよう、という、と—— つてもあかるくて、あたたかい、光のたまが、ちきゆうをてらす、らしいのです。にんげんがつくった、あかりが、いらなくなる。いろんなものが、みえるようになる。そんなじかんが、やつてくる、というのです。

ぼくをおこしたあと、お父さんは、コーヒーをいれて、そのあと、ぎゆうにゆうをあため、ぼくにわたしてくれました。あたたかいぎゆうにゆうをのむのは、ねむるまえだけつてルールなのに。きようは、やつぱり、とくべつです。でも、あたたかいぎゆうにゆうをのんでいると、なんだかまた、ねむたくなつてきて、ぼくはソファでこつくりこつくり、ふねをこいでいました。

おい!!　おい!!　お父さんのこえで、ぼくはめをあげました。いつのまにか、ねむつて

いたようです。まどのそとを見てごらん。お父さんが言うので、ぼくは立ちあがって、まどのちかくに行きました。そらが、いままで見たことのない、ぼんやりとした色にかわっていました。ずここのじかん、画のように絵のぐをたらしたときみたい。ぼくがそう言う、お父さんはにつこり、ほほえみしました。

どれくらい、そうしていただしよう。だんだん、そらが白くなってきて、お父さんは、2はいめのコーヒーを、いれました。父さん、今から母さんにでんわしてみようとおもうんだ。うちで、そらを見ないかって、言おうとおもうんだ。お父さんが、コーヒーかたてに、つぶやきます。ぼくは、なんて言ったらいいか、わかりませんでした。お父さんは、スマホをいじって、お母さんにでんわをかけようと、しています。

スマホからきこえてくる、お母さんのこえは、なんだかとっても、ふきげんそうでした。お父さんのくちようも、ちよつとピリピリ、しています。それでも、お父さんは、なんかいもなんかいも、ことばをかさねて、お母さんをせつとくしていました。どうやらお父さんは、クサクてキザなことを言ったらしいです。お母さんが、そういうクサクてキザなことへいきで言えちやうようなところがカンにさわるのよ、と言っているのがきこえます。どういいういみでしょう。

でんわをきつたあと、お父さんは、ぼくにウインクをしました。お母さん、くるつてさ。なんだかぼくより、うれしそう。はなうたをうたいながら、たばこに火をつけました。このたばこのなまえ、へいわ、つていみ、なんだつて。むかし、お父さんがおしえてくれました。お父さんは、はじめての、あさ、を見つめながら、まぶしそうなかおで、けむりをくもく、はいていました。

---

6つの瞳が、わたしを見つめています。

1人は、6歳くらいでしょうか。わたしを使うのに、ちょうどいい年頃の男の子です。その両脇にいる男女は、この子の両親でしょう。「こんなものまでとつてあつたのか」「絵

日記なんて、懐かしいわね」、わたしをめぐりながら、楽しそうにおしゃべりしています。ばらばらとページをめくっていた手が、あるページで止まりました。3人とも、じつと書かれているものを読んでいます。わたしとしては、いささか不本意でした。というのも、そのページには、肝心の絵が、ないので。

「ねえ、これなーに？」男の子が、母親にたずねます。

「これはね、おじいちゃんかさつちゃんとおんなじくらい、子供だったときに書いた、絵日記よ」

「ふーん、へんなの」

男の子、文字ばかりのページに飽きたのか、「ねえ、はやく、つぎのページ、みようよ」と、両親をせかします。わたしとしても、そうしてくれたほうがありがたいのですが、両親はいつまでも、そのページをめくろうとしません。

たつぷり、5回は読んだんじゃないか、それくらい時間が流れました。両親はわたしをじつと見つめて、ほほえみながら、「だいたい、ほんとうのことね」「うん、だいたい、ほんとうのことだ」なんて、言い続けていました。男の子はすっかり、飽きてしまったようです。「公園で、みつちゃんたちとサッカーしてくる」。言いながら、玄関に駆け出しました。

「行つてらっしゃい。夜になる前には帰ってくるのよ」

母親は、わたしから目を離し、やさしい声で、そう言ったのでした。